

男女共同参画標語  
最優秀賞

「取手なら  
自分らしく輝ける」  
菅谷 真白さん 取手第二中学校(当時)

47号

令和2年3月1日発行

# 風



優秀賞

「認め合い つないだ手から 開く未来」  
八城 立樹さん 取手第一中学校(当時)

「この社会 一人一人が 主人公」  
石田 瞳さん 取手第一中学校(当時)

## 防災・減災を考える 自助／共助／公助

日本は自然災害の多い国です。近年、毎年のように大きな自然災害に見舞われ、しかも、その規模は次々と過去の記録を塗り替え、予測が難しくなっています。記憶の新しいところでは、昨年秋に関東を直撃した台風15号、台風19号。結果として取手市に大きな被害はありませんでしたが、身近に迫る恐怖をリアルに体験し、自然災害に対する認識の甘さを実感した人も多かったのではないのでしょうか。

いつ起こるか分からない自然災害のリスクにどのように向き合い、どのような備えをすべきなのか。防災・減災の核となる「自助」と「共助」、そして「公助」の取り組みを取材しました。

### 自分たちの地域を自分たちで守る防災活動 「自主防災組織」

東日本大震災の経験から近年注目されているのが「自主防災組織」です。これは「自分たちの地域で自分たちのできる防災活動を行っている組織」を指します。現在、市には自主防災組織が89組織あり、取手市もその結成と活動を支援しています。

### 助け合いの連携 戸頭町会自主防災会を訪ねて

関東鉄道常総線の稲戸井駅から戸頭駅周辺の約3,000世帯7,000人が居住する地区に戸頭町会があります。今回はその戸頭町会の「戸頭町会自主防災会」(以後、「自主防災会」)を訪ねました。

### 自主防災会の結成と活動内容

戸頭町会は昭和50年に「安全で安心して暮らせる住みやすい町作り」を目的に発足しました。その後、防犯パトロールや防犯標語の掲示等の活動を展開する中で、自主防災の必要性の高まりと他の地域での防災会の設立を契機に、平成9年に自主防災会が独立した組織として結成されました。



結成22年目を迎える自主防災会の活動は、「災害による被害の防止、軽減を図るため」に「防災教室・防災訓練などの啓蒙活動」「防災資機材・防災備蓄品の確保と点検」「災害時要支援者の把握(「あんしん台帳」の作成)と支援体制の構築」等、多岐にわたっています。毎年、防災の日の前後に常総水害体験者のお話を聞く講演会など、災害時の支援の在り方を考える「防災のつどい」を開催しています。昨年には取手市の出前講座を招き、「ハザードマップ」や「マイ・タイムライン」についての勉強会を実施しました。

また、戸頭中学校の防災教室では戸頭地区自主防災組織連絡協議会の7つの防災会が合同で参加し、全校生徒にAEDの救命実技の指導、避難所でのトイレや階段下降機の展示説明、ロープの結び方、三角巾の活用、傷病者搬送の仕方など消防署の指導員とともに講義しました。



戸頭中学校で開催した防災教室

### 課題と今後の活動

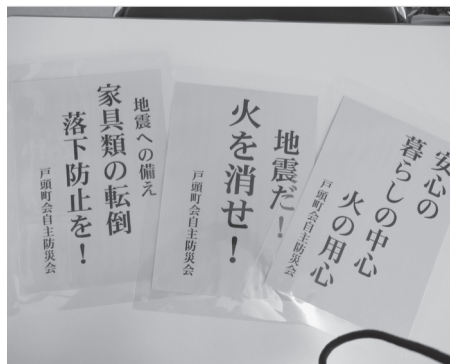
戸頭町会地区は「高台にあり、水害による災害は少ない」という思いから住民の防災意識は低い。」と会長の野見山さんは話し、啓蒙活動の重要性を強調します。また、「住民の65才以上の高齢化率は39%、災害時の助け合いを考え、対策を練る」ことが大切だと言います。その一環として戸頭町会と自主防災会は、「あんしん台帳」を作成しています。台帳には災害時に手助けを必要とする方が登録されています。「あんしん台帳」は3年に一度更新をし、昨年の台風時にも活用されました。

今後は現在の活動を継続し、更に戸頭地区の防災活動に貢献したいと語ります。そして「戸頭に大地震が昼間に発生した時、若者は都心で仕事をしていることが多く、地元にいる元気な高齢者と若い学生さんが最も頼りになる存在だ。中学校の防災訓練などを通じて防災の技術を高めてもらいたい。」最後に「防災家族会議を開いて、身を守る方法や避難場所の確認、備蓄品の点検などを習慣づけておく」とよい。」とアドバイスをいただきました。

女性7名を含む45名が、防災リーダーとしてボランティアで活動をしています。防災リーダーは毎月第一土曜日の午後定例会を開き、防災備蓄品の点検、ポンプや携帯無線の操作確認などを繰り返し実践しています。そして、いざという時のために備えています。日頃の地道な自主防災活動が「安全で安心して暮らせる住みやすい町作り」に結びついている、このことを肝に銘じた訪問でした。(落合)

←左

45名の防災リーダーが各自持っている防災セット。(無線、救急用品ポーチ、三角巾、のこぎり、ボール、要支援者ファイルなど)無線は毎月1回の定例会で操作確認。東日本大震災で電話が不通になった際は町内の状況把握に活躍したそうです。



←左

防災会で配布している防災標語。玄関などに掲示し、日頃からの備えに役立っています。

### 地域防災・減災に貢献

### 女性消防分団

皆さん、取手市女性消防分団を「存じ」でしょうか？合併前の旧藤代町制時に、茨城県内で初めて結成され、約25年の歴史があります。今回は、市内事業所で事務職として働く傍ら、女性消防団員として活躍する新堀純可さんに、お話を伺いました。

### 現在の活動状況

市消防団に属する女性消防団員数は、現在23名。活動内容としては、火災など危険を伴う消火活動を除き、救命講習や防火指導、避難訓練など地域の防災・減災のための啓発・広報活動を実践しています。

最初に、団員になったきっかけを伺うと「PTA活動の延長のような感じで、友人に誘われて参加し、約10年になります。他の団員と調整しながら、無理なく月5回活動しています。市内イベントや全国各地の消防施設での見学や体験研修、消防関係の大会参加など、土日や有休を活動に充てて、充実した日々を送っています。」とのこと。

現在、応急手当指導員の資格を取得し、消防署や地域の防災訓練等の救命講習会で指導しています。

また、一昨年には住宅用火災警報器や消火器の取り扱い啓蒙のため、各戸を訪ねて、防火訪問を実施しました。

### 最新の情報吸収と技能向上

日々の研さんとしては、消防活動に従事する全国及び県内の女性消防団員活性化大会に参加し、事例研究や情報共有と共に刺激も享受するそうです。

新堀さんは、奈良市消防団が心理的救急処置(PFA)を取得したとの発表に共感し、メンタルサポートの重要性を痛感しました。そこで、独学で上級心理カウンセラーの資格を取得。被災者や強度ストレスを体験した人たちの心のケア・サポートにも対応したいとのことでした。また毎年、消防学校に一日入校して、各種訓練や消火活動体験を通じて、技能向上に努めています。前向きな姿勢に感心しました。

### 地域の協力で減災

減災の観点から、市内の地域の防火・避難活動について尋ねると「多数の住民参加による訓練を行っている地域と関心の薄い地域があるなど、様々です。要介護者がいる家庭に対する避難支援など、地域で情報を共有し、手助け出来るかも課題です。日頃からお住いの地域に関心をもち、災害に備えることが大切です。」

### 今後の活動展開

今後の活動展開については、幼児防災教育強化の視点から、



AED講習会での指導の様子

子育て支援センターなどで、パネルシアターを行ったり、身近な百貨ショップで揃う防災グッズを市内イベントで展示するなどし、関心を高めたい。更に、団員仲間を増やしたい。」とのこと。

「台風や豪雨で避難所開設時には、避難所設営研修や運営訓練での参加訓練を活かし、少しでも支援できるよう取り組んでいます。」と頼もしい回答でした。

インタビューを通して、明るく優しい人柄の内に、行動力や使命感を感じ、頭が下がる思いの取材でした。(糸井)



昨年11月のネットワークフェアで展示した、100円ショップでそろえられる「防災・避難グッズ」…保温アルミボンチョ、ヘッドライト、折りたたみ携帯マットなど約30点

### 天災は必ずやってくる

### 非常時の明暗を分ける「平常時の準備と助け合い」

### 減災の考え方と3つの「助」

どんなに技術力が進歩しても、自然災害は完全には防げません。そこで生まれたのが、「自然災害の発生を想定したうえで、被害を最小限に食い止める」減災の考え方です。

防災・減災の取り組みには、「自助・共助・公助」があります。「自助」は、自分で自分を守ることで、そのための努力や準備をすること。「共助」は、地域や近所で助け合い、地域の安全を守ること。「公助」は、国や自治体、防災機関などによる公的な支援です。

この3つの「助」は、どれも欠くことができません。日頃からどのように連携し、相互に補い合えるかが非常時対応の成否のカギを握ります。

### 「公助」の役割と限界

各市町村は、災害対策基本法に基づき地域防災計画を定めています。この地域防災計画は、わが大綱であり、具体的な対策を実施に即して立てる必要があります。取手市では、取手市地域防災計画に従い、避難所マニュアルなどケースごとの対応マニュアルを作り、事前対策を立てています。これに関して、担当課である安全安心対策課は、「昨年の台風19号で、現実

は計画・マニュアル通りに行かないことを痛感した」そうです。

その反省を整理して見直しと改善を推し進めているところであり、同時に、情報と知識にとどまらず、実地訓練やコミュニケーションを重ねることを課題として挙げています。

大規模災害では、「公助」の機能が低下します。職員の数にも対応能力にも限界があるからです。物流や物資の不足、行政自身が被災して機能が麻痺することも考えられます。私たちは、「公助」に限界があることを知っておかなければなりません。

### 「共助」は参加することから始まる

「共助」の代表的な存在として自主防災組織があります。今回取材した戸頭町会自主防災会は市内で最も機能している組織の一つです。一方で、自主防災組織のない地区や機能していない地区も多くあります。取手市は、各地区に自主防災組織の結成と強化を呼びかけています。地区により大きな格差があるのが現状です。

住民一人ひとりにできることは、日頃から地区の防災の話し合いや取り組みに積極的に参加することです。その積み重ねが、地域とのつながりと助け合いの共通認識を強め、地域防災の基礎作りとなります。

地域防災の中核を担うもう一つの組織は、消防団です。特に女性消防団員は、過去の災害で見過ごされがちであった女性視

点での支援が可能なおことから、より踏み込んだ現場での活躍が期待されます。災害時の支援人材を育成するという観点からも、消防団の役割は重要と言えるでしょう。

### 「自助」できますか？

最終的に自分の命は自分で守らなければなりません。

自然災害が襲ってきた時、あなたは「自力で避難できる状態」にあると言い切れますか？万一、病気や怪我をしていたら、家に1人だったら、外出中だったら・・・

対策を「知っている」だけでは、いざという時に行動に移せません。日頃やっていないことは非常時に実行できないものです。だからこそ、起こりうる場合を想定して平常時に備えと訓練をしておかなければなりません。

安全安心対策課では、※「マイ・タイムライン(個人の災害時行動計画)」の作成を奨励しています。小中学校向け作成キットは、非常時の行動をシミュレーションするツールとして誰でも利用できます。風水害を想定していますが、非常時の状況を想定しながら最適な行動を考えることは、地震等の突発的災害にも有効です。

個人だけでなく、家族、地域でタイムラインを作れば、災害のリスクを共有し、何が必要で、どう行動すべきかを話し合うことにつながるでしょう。今の準備が未来の自分を救うのです。(下園)

### 編集後記

近隣の台風被害を他人ごとではないと強く感じました。日頃の備え、近所への声掛け、そして早めの避難が大切。取材を通して「マイ・タイムライン」を考えることや家族会議での認識共有の必要性を痛感しました。災害時、自分が支援を求められる側になった時にどんな手助けが欲しいか考えてみることも大事です。大丈夫と思っただけでも頑張りすぎないで周囲の人に自分の状態を知らせておきましょう。自然の力には勝てませんが、人の知恵と和で立ち向かいます。

(河口)

### ※マイ・タイムライン(個人の災害時行動計画)

マイ・タイムラインは、平成27年9月に起きた関東・東北豪雨の鬼怒川の氾濫による被害を教訓として、常総市や国土交通省等が「逃げ遅れゼロ」を目標に始めた取り組みです。災害時の避難のしかたは、その人の置かれている環境や状態により異なります。マイ・タイムラインで「いつ」「誰が」「何を」を時系列に整理し、自分に合った適切な避難行動を事前に考えておきましょう。

取手市HP「災害に備える」



ハザードマップを確認できます

下館河川事務所HP

「みんなでマイ・タイムライン」



マイ・タイムライン作成キット取得できます

発行日 令和2年3月1日  
編集発行 取手市 市民協働課  
下園淳子 河口優子  
落合伊佐男・糸井弘  
取手市寺田5139  
TEL 0297-74-2141  
FAX 0297-73-5995  
H・P http://www.city.toriidebarak.jp/  
Eメール s-shien@city.toriidebarak.jp/  
表紙絵 有本 唯